臨床医学総合誌としての「医療」の可能性

国立病院機構東京医療センター臨床研究センター
角田晃一

編集委員会に平成17年3月より参加させていただき，予算の問題，雑誌としての方向性など編集委員会の直面している沢山の問題がある事がわかった．前編集委員長の鈴木紘一先生のご英断で，投稿に頼らず特集号を増やし，医療の購読層の間口を広げる方針も決定し医師のみならず医療従事者全体の情報誌という，これまでに類を見ない壮大な雑誌へ変貌を遂げようとしている．

しかしながら，問題点としては，1）経済的基盤の確立，2）投稿論文の獲得の二つの大きな問題が残っている．このうち投稿論文に関しては，日本のどの雑誌も投稿論文の減少に悩んでいる．原因は一言で言えば日本語の論文が評価されにくい点である．これにはアメリカの民間会社（ISI）が開発し毎年出版されるJournal of Citation Reportsのインパクトファクター（IF）が深く絡んでいる点は否めない事実である．

IFは基本的にその雑誌に発表された論文が，その後の2年間にその雑誌を含む世界の一流誌に何回引用されたかを示す，1論文あたりの平均値と私は考えている．例えばNEJMやLancetなら1つの論文が平均で，その後の2年に20－30回用されているわけである．IFをあげるテクニックに，著明な先生のReviewを載せる手がある．例えばその道で，余人を持って変えがたい先生がある雑誌にreviewを書けば，おのずとその論文は引用されやすく，起死回生のヒット商品のごとく，雑誌の一論文あたりの平均であるIFは一気に上る．もちろん，いつまでもその手は使えず，暫くすると落ち着く値にもどる．IFの賛否両面からの議論はこれまで多くなされてきたが，IFは論文の客観的評価としては最も正当かつ簡単な評価法のひとつであることは間違いない．このため，日本の各学会英文誌はIFをつけようと頑張っている．

「医療」の購読者にはIFのつく論文を書き続けている先生が多くいる．一般に，まずIFの安定した海外の英文の医学総合誌や専門のJournalに投稿する．それでだめな場合PubMedを目指し，他の英文誌や国内の英文や日本語の学会誌に投稿する．実際，論文は可愛い自分の娘を嫁にやるようなもので，出来るだけ経済的に安定した（IFの高い），愛される（引用されやすい），末永く幸せな（廃刊にならない）雑誌に投稿することを望むのが一般的である．

しかしながら，日本国内にはIFの概念を知らずに投稿する先生や英語に発表する程ではない，あるいは英語で書けないし時間がないと自分の評価を低く見積もり，素晴らしい発見を遠慮している先生もいるはずである．もし，「医療」にIFがついたらどうなるか想定すると．まず，投稿論文数は増大すると考えられる．

そこで，「医療」に投稿された論文のうちオリジナリティの高いものや質のよいものは，こちらで英文に訳して年に1回，例えば厚生労働省という最高の基盤をもとに「医療」の国際版として，Japanese Journal of Clinical Medicineなどのタイトルの医学総合誌を作り海外に日本の医療を紹介してはいかがであろう．

その構成は，

1．各National Centerをはじめ国立病院，療養所の著明な先生や各科の代表的先生にReviewを書いていただく．
2．各科のよい論文を募り英訳を手伝い短くわかりやすくしてOriginal articleやCase reportを載せる．
3．各施設から珍しいまたは代表的疾患の画像のReportを載せる．

厚生労働科学研究費を多くもらっている先生には暫くReviewは専門誌でなく「医療」国際版に出していただく，あるいは研究の一部を必ず1つの研究費から1篇は「医療」に投稿する義務を厚生労働省から条件として出していただければ最高である．このうち論文の掲載は著者名，施設名を消しての査読のもと，採択を決めて質のよいもののみを採る（採択率10—20%程度）．このReview誌を暫く続ければいつか「医療」はJAMAやBMJ程度にはIFがつくのではと考える．

このためには予算はかかる，「日本の臨床医学の有効な海外への紹介の手法に関する前向き研究」として皆で厚生労働科学研究費に応募して取れればよいが，本来は別個に予算をつけていただければ最高である．つまり，研究として日本の臨床的医療の海外紹介誌を作成し結果

は雑誌「医療」の発展のみならず，何より国内外に対する，厚生労働省と日本の臨床医療のよい宣伝にもなるわけである．出来れば英文誌に採択された優秀論文には研究費，賞金など優遇措置が賜れればさらに弾みがつく．

当たり前の意見かも知れないが，現在の世界の医学の共通語は英語である．日本の雑誌で海外から高い評価を受けている各分野の英文専門誌はあるが，NEJM，LANCET，JAMA，BMJなどに相当する世界的に影響力のある医学の臨床総合誌をいつかは日本で発刊しなければ，いつまでたっても日本の医学のレベルが海外から不当に低く評価さる．さいわい，「医療」は他に類を見ない医学総合誌で，編集委員会のメンバーは様々な分野，臨床科から参加されている．幸か？不幸か？日本の雑誌で，これが実現可能な雑誌は私の知るところでは「医療」しかなく，これまで日本語で書いたばかりに国内外から不当に評価された先達の思いを考えると，せめて年一回Japanese Journal of Clinical Medicineを世界に向けて発刊する必要性を，大きなレベルで将来に向けて，今こそ考慮すべき時と考える．